



【写真2】  
家事記(表紙)



【写真1】  
色川三中肖像画

## 色川家の日記「家事記」

六月十二日 箱根は晴れて少し風がある。夜に入ると一層涼しくなった。今日は土浦の祇園祭の前日だ。どうしていることだろうと不安な気持ちになった。

六月十三日 晴れてとても暑い。今日は箱根も権現様のお祭りだ。今日からの土浦の祇園祭をほったらかして、箱根の祭りを見るのはどうかといわれたので見に行かなかった。今年がわが田宿町の当番だ、どうなっているだろうと心配でたまらない。

天保5(1834)年、箱根に滞在していた土浦の商人色川三中(通称 三郎兵衛 1801~1855 写真1)の旅日記を一部抜粋して現代風にご紹介しました。

景勝と名湯に恵まれた箱根は、古くから多くの人々を引きつけてきました。三中はこの年34歳。5月30日に土浦を出発しました。江戸で用事を済ませ、6月9日に江戸を発ち、11日早朝に塔ノ沢に到着しました。着くなりのおんびりと写本を楽しんだと日記に記しています。誰にも邪魔されず読んだり書いたりするのが楽しみというのは、商人でありながら国学を志した三中ならではのかもしれません。

せっかく手に入れた自由時間のはずなのに、三中は祇園祭の時期に旅にでたことが不安で仕方がないようです。祇園祭は旧暦の6月、八坂神社(現真鍋五丁目)の牛頭天王の御輿を迎えて数日間わたって行われました。朝鮮通信使や大名行列の仮装など、各町内が出

し物に趣向を凝らし、行列は土浦城内にも入って披露されました。武士と町人が共に祝う城下町最大の祭りだったのです。この年の祭りの当番は色川家の属する田宿町でした。そんな大事な時に、なぜ当主である三中が箱根に行ってしまうのか、事情は不明ですが、この時期の三中は繁忙な家業や家族の死にめぐりあい、心身の疲労をいやさねばならない状況だったようです。

現代的な通信手段がない時代、遠くにいては自宅の様子は知るよしもありません。土浦には三中の母と20歳になったばかりの弟金二郎らが兄の留守を守っていました。案の定、金二郎のもとには祇園祭に若衆として出るようにとの依頼がきました。兄が留守なので出られないと断つても何度も頼まれ、押し問答となったようです。

なぜ私たちは留守宅の様子を知ることができるのでしょうか。実は三中は箱根へ出かける際、自分の代わりに家の日記を書くよう金二郎に命じました。

色川家の日記「家事記」は三中が書き始めたものですが、天保5年5月の三中の箱根行き以降、書き手は徐々に金二郎へと移っていきます。金二郎が主体となると日記の名も「家事記」と変わります(写真2)。31年におよぶ色川家の日記、その原動力は三中と金二郎、兄弟二人の共同作業だったのです。

この日記5冊は6月下旬まで展示室3に展示しています。また、全文を『家事志 第四巻』として翻字し、受付にて展示、販売しております。

岡市立博物館(☎824・2928)